

かしま HOT 通信

2月号 Vol.361

令和5年(2023年) 2月1日発行

■編集/かしま病院広報企画室
 ■発行/社団法人養生会
 〒971-8143
 福島県いわき市鹿島町下蔵持字中沢目22-1
 tel.0246-58-8010(代) fax.0246-58-8088

ご意見・ご感想は...
 上記住所へ郵便、またはE-mailでお送り下さい。
 かしま病院広報企画室まで
 kouhou@kashima.jp

ホームページ <https://www.kashima.jp>

かしま病院

検索

スマートフォンをご利用の方は、
 QRコードを読み取り、アクセスしてください。
 PCサイトと同じ内容がご覧頂けます。



- 1 巻頭特集
医療技術部
放射線画像診断科のご紹介
- 2 「元気度アップ 体力測定会」
開催報告
- 3 コラム ひんがら目(188)
「教員志願者の減少
50年前の教育実習の思い出」
呼吸器科 部長 山根 喜男
- 4 ようこそ家庭医療へ!
リハビリPOST
「第98回 常磐医学会」に参加します
かしま荘通信

マイナ受付 開始しました



令和5年1月4日より、マイナンバーカードを健康保険証としてご利用いただける「マイナ受付」を開始しました。
 ご利用の際は、受付に設置のマイナ受付機にマイナンバーカードをかざしてください。マイナ受付による診療情報の取得、活用をすることで、より質の高い医療を提供して参ります。
 ※重心、こども医療、乳幼児医療、免除証明書、肝炎受給者証等の証書をお持ちの方は、受診時に証書の提示をお願いします。



▲マイナ受付機

巻頭特集

医療技術部 放射線画像診断科のご紹介

診療放射線技師は英名では「Radiological Technologist: 放射線医学の科学技術者」です。

放射線画像診断科では医師の指示のもと、さまざまな装置を用いて撮影し画像情報を提供しています。

放射線画像診断科について

放射線画像診断科とは、医師の指示のもとで放射線を用いた検査や画像診断、治療に携わる医療技術者です。
 医師と歯科医師以外で人体に放射線を照射することが認められているのは診療放射線技師のみです。現代医学の世界では専門領域の細分化と分業化が進んでいるため、放射線を用いた検査はもっぱら診療放射線技師が行っています。

「診療放射線技師」とは

診療放射線技師とは、医師の指示のもとで放射線を用いた検査や画像診断、治療に携わる医療技術者です。



放射線科医は、放射線を使ってがん治療を行う放射線治療医と、CTやMRIなどの医療画像を診断する放射線診断医に分かれています。CTやMRIなどの技術は日々進歩するため、放射線診断医は新しい画像技術を日々学習し、診断に活かしています。

ドラマ「ラジエーションハウス」では本田翼さんが放射線科医を演じ、「アメリカでは放射線科医

「放射線科医」とは

放射線科医は、放射線を使ってがん治療を行う放射線治療医と、CTやMRIなどの医療画像を診断する放射線診断医に分かれています。CTやMRIなどの技術は日々進歩するため、放射線診断医は新しい画像技術を日々学習し、診断に活かしています。

放射線画像診断科の紹介

スタッフ数 放射線技師 10名 助手 2名

- 国家資格: 診療放射線技師
 認定資格: 放射線管理士 2名
 CT 認定技師 1名
 胃がん X線検査技術 B 認定 2名
 画像等手術支援認定技師 1名
 検診マンモグラフィ撮影
 認定診療放射線技師 2名
 医療画像情報精度管理士 1名

当院では画像診断を専門とする放射線診断医が在籍していますので、質の高い画像を提供し診断レポートを作成しています。
 救急対応としてはCT、MRIを中心とした24時間体制で、迅速かつ適切な検査ができる環境を整えています。

はとても重要視されており人気も地位もあります。彼らがいないと病院が成り立たないことから、ドクターズドクター、医者をリードする医者と呼ばれています。

放射線科医はすべての患者のCTやMRI画像を読み、診断を下す重要な役割を担っています(「デジタルラジオエーションハウス・第一話・一部抜粋」と説明しています)。



画像を読み取る中山文枝医師

放射線画像診断科の業務

1 一般撮影

X線を使用する代表的な検査です。当院では画像をデジタルで取り扱い、さまざまな画像処理を行って、診断価値の高い画像を医師に提供しています。

2 透視撮影

X線を使って体の中を見ながら行う検査で、主にバリウムの検査

を行なっています。

当院の装置はデジタル方式(FPD)で、低被曝で鮮明な画像を得ることが出来ます。

3 CT検査



CT造影検査の準備をしています。

X線装置を体の周りで高速回転させて撮影することで、体の輪切りの画像を作成することが出来ます。被ばく線量は、CT認定技師と放射線管理士が中心となつて最小限のX線で撮影できるように調整しています。

当院では2021年12月に新型のCT装置を導入しました。

このモデルではAIを搭載しており、従来の装置と比較して、検査時間が短く、低被曝で高画質な画像を作成することが可能です。当院で撮影する健康診断の「胸部CT」では、日本の診断参考レベルの約10分の1の被ばく線量で撮影できます。

4 MRI検査

強力な磁石と電磁波を利用して体の色々な方向の輪切りの画像を

作ることが出来ます。画像上CTと異なるのは、CTでは検出困難な「組織の炎症」や「骨挫傷」の評価が行えます。また特徴としてCTと異なり放射線による被曝がありません。

5 骨密度検査



骨密度の準備中です。

ごく微量のX線を用いて骨の中の骨塩量と骨密度量を測定する検査です。

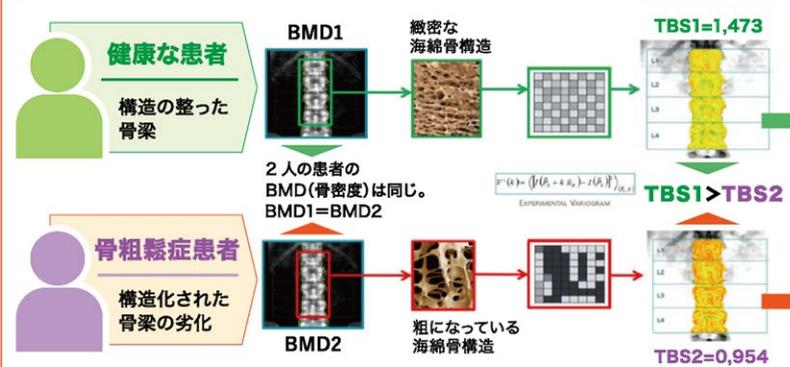
骨密度が同じなのに、なぜか骨が折れやすい人がいます。

当院では2022年12月に新型の骨密度装置を導入しました。骨の強さは骨密度(BMD)が70%と骨質が30%により規定されています。

従来の装置では骨密度しか計測できませんでしたが、新しい装置では骨質の構造を評価するTBSを測定することができます。当院では骨折リスクを事前に回避するために、骨密度(BMD)+骨質(TBS)の検査をおすすめしています。*下図参照

骨質(TBS)検査でわかること

2人の患者は異なるTBS(骨質)値
異なる治療方法が
決断される



7 血管造影検査

血管撮影、IVR(血管内治療)以外にも多目的に使用される機器で、嚥下造影、各種ドレナージ撮影なども行っています。

8 ポータブル撮影

移動が困難な患者さんの所まで出向いて単純X線撮影を行います。

9 画像情報システム

検査によって得られた画像情報を各診療科にリアルタイムで配信するシステムです。

このような画像情報システムで、検査効率、検査精度の向上を実現しています。患者様にとってはわかりやすい検査結果の説明や待ち時間の短縮、診療材料費の低減などのメリットがあります。

放射線画像診断科の目標

各検査機器(CT, MRIなど)の質的維持を行い、予防医学から救急医療まで質の高い医療を提供できるように技術と知識の向上に努めていきたいと考えています。

また、医師・看護師・事務職などと連携したチーム医療を行い、患者さんが安心して受けられる検査の提供に努めていきたいと考えています。





元気度アップ 体力測定会

開催報告



昨年12月16日に、元有料老人ホームかしまホーム（いとち拠点）にて元気度アップ体力測定会を開催しました。この会は小名浜地域包括支援センター様との合同企画で、地域にお住まいの方を対象に行われました。

開催のきっかけは、市内の公民館や集会所にある住民の交流する場や機会が高齢化や長期的なコロナ禍などによる理由で減少していることです。小名浜地域包括支援センターでは交流の場を増やす取組として、ラーメン屋さんや教会など普段から人とのつながりを持つサービスと協力して交流の場を作り、人と人のつながる機会を一つ一つ増やしています。今回鹿島町に新しい交流の場を作るべく、いとちプロジェクトに企画の提案をいただいたのが最初のきっかけです。

体力測定会では、地元である鹿島町に住んでいる方を中心に10数名の方にお越しいただきました。参加者は足指筋力測定、握力測定、脂肪の模型に触れる体験を行い、自分の筋力レベルを知り、専門スタッフからアドバイスを受けるなど知識を深めました。

また先生とおしゃべりタイムでは、渡邊聡子先生、中山文枝先生と地域の方がゆっくりとお話できる時間となり、自分の身体のこと、地域の昔話などに花が咲き、良い時間となりました。



次回は、暖くなる季節に開催を予定しております。今後も鹿島町を中心に盛り上げていきたいと思っておりますので、皆様どうぞよろしくお願いいたします。

教員志願者の減少

50年前の教育実習の思い出

教員試験が定員割れする時代になったそうです。小著が学生の頃は学校の先生になるのは困難でした。コネがないと無理そうでした。それでも就職先に高校教師の道も視野に入れていましたので、理学部の学生時代は教職課程の単位をとり、教育学部にも足を踏み入れ、中学、高校の数学の教員の免許を取りました。

教育実習は東京都港区の芝浜中学校で2週間過ごしました。幸か不幸か、指導教師の関先生が出張のため数日間不在になり、2年生の学級担任の真似事もしました。生徒からの集金なども任せられたので、すからおらかな時代でした。隣の港中学には3年生の森昌子さんが通学していました。「せんせい」で歌手デビューした頃でした。芝浜中学と港中学は平成13年に統合されて三田中学になっています。

芝浜中学は都心の小さな中学校でしたが、数学の担当の先生は2人だけでした。関先生と榊忠男先生で、榊先生は数学教育の世界では有名でした。指導教師ではありませんでしたが、他校との研究会にオブザーバーとして同行させて下さいました。

教育実習に関する大学の指導教官は、雑誌「ニュートン」の創刊者で、地球物理学者の竹内均教授でした。小著の授業参観に指導教師の関先生とともに時間を割いて下さり、講評して貰いました。小著にとっては人生の小さな宝になりました。

2週間の実習が終わった土曜日の午後、生徒たち10名近くに誘われて東京タワー近

くのラーメン屋で昼食をともしました。驚いたことに生徒たちは貧乏学生を慮って自腹を切ってくれました。

その後、数週間が過ぎた頃2名の生徒が港区の田町から小著の住んでいる世田谷区の羽根木町まで自転車を漕いで突然現れました。3畳一間の2階部屋に招き入れ1時間ほど談笑しました。自分が中学時代に社会科の福井淳人先生の下宿にお邪魔したことが思い出されました。教師っていいなあと感じました。帰るときに昼食をご馳走しようと思いましたが、案の定、貧乏学生を案じて手ぶらで帰って行きました。

しかし、教員採用試験は狭き門でしたので諦め、医学部の学士編入試験を受け、思ってもいない世界に紛れ込んでしまいました。教師志願者が減っているのはなぜなのでしょう。

先生が師と仰がれた時代は遠く去り、雑務と課外活動に忙殺され、父兄だけでなく生徒自身からも軽んじられかねなくなった時代背景が原因の一つと推察します。



このことは医療の世界にも相通します。情報過多の世界で、最高の医療を要求して健康はプロに丸投げをする一方、耳の痛い医療者からのアドバイスには目を背け、自立心のない呉れ呉れ主義の世界になってしまいました。信頼関係が築けなければ、自分を守るためにマニュアルやガイドラインに従うしかなく、医療現場から感謝と感動が消え、創意工夫や働き甲斐が湧いて来なくなった気がします。

疑いと監視の眼で観られるのではなく、信頼と寛容に支えられて、師と仰がれる職業を全うしたいものです。

（呼吸器科部長 山根喜男）

ようこそ 家庭医療へ!

～ いわきに生きる家庭医育成への挑戦 ～



我が国の教育史上最大の偉業は、江戸時代に庶民の読み書き能力を世界最高水準にまで急速に向上させた寺子屋での取り組みとされ、後に「教育爆発」と呼ばれるようになりました。諸説ありますが、大飢饉などにより幕府の運営が不安定となっていた当時、全国の各藩が、逼迫した行政を立て直すための人材育成をはかるべく、教育に注力するようになった成果といわれています。これは、政府に任せていても十分に解決しないコロナ禍における諸問題に対して、全国の地方自治体、医師会、医療・福祉関係多職種、地域住民らが一丸となって知恵を出し合い、難局を乗り切ろうとしている現在の我が国の姿と酷似しているように感じます。社会的ニーズを満たすために注力することは最も合理的かつ効果的であり、新たな「教育爆発」の契機と成り得ると思います。

我が国の医師教育は主に臓器別に専門分化してきたため、地域を基盤として臓器横断型で包括的管理能力に長けた総合

第156回 教育は爆発だ!

石井敦 病院長



診療医の育成に遅れを取っています。私は2002年にかしま病院に赴任し、総合診療を学んだ希少な医師として院内外の医師、多職種、地域住民に総合診療を周知するための教育活動を継続してきました。

その結果、かしま病院では2008年から総合診療を学ぶ専攻医の後期研修や医学生の臨床実習、2013年からは臨床研修医の初期研修受け入れが始まり、近年爆発的に受け入れ実績数が伸びています。病院全体としても、中山大理事長や中山文枝診療部長が積極的に総合診療を取り入れた病院機能の充実に取り組まれ、2018年から日本病院会病院総合医研修認定施設、2020年からは日本病院総合診療医学会認定施設を取得しました。また、他の専門領域の医師が診療所を開業するために必要な技術を学びなおすための再学習支援に積極的に取り組んでいます。総合診療の教育を軸に、地域に貢献できる「めんどろみのいい」病院づくりに取り組み、社会的ニーズの波に乗った新たな「教育爆発」を目論んでいます。

かしま病院では、2008年度から家庭医を志す研修医や地域医療実習を行う医学生を受け入れています。このコラムを担当する石井敦病院長は日本プライマリ・ケア連合学会認定指導医として、研修医・医学生の指導を行っています。



再就労支援について

今回はケガや病気で入院した場合、退院後に仕事復帰しようとする方に対して、どのような支援を行っていくのかについて話をさせて頂きます。まず入院時のリハビリ開始の際には、本人または職場の関係者に仕事の内容・環境の聞き取り（例として、デスクワークなのか・通勤手段はどのような方法か・他者とのコミュニケーションが多い仕事か等）をして情報収集をします。次に職場復帰に必要な高次脳機能（注意力・認知・判断力・遂行機能など）や身体能力を評価し、現在の心身状態でどこまで仕事をこなせるかを検討します。実際の仕事における場面を想定して問題点を抽出し、プログラムを立案していきます。また、定期的に他職種（医師、看護師、社会福祉士、

栄養士など）とカンファレンスを行い、その都度患者・家族とも話し合いを持ち、復職に向けての道筋を検討していきます。

患者様の中には病前と同じ仕事が難しい方もいます。その場合は、職場の上司や同僚に対してリハスタッフまたは社会福祉士から現状を報告し、レベルに合った仕事の内容について確認していくことが必要となります。また、復職となる場合には職場の方に、本人の苦しい作業内容を申し送りすることも大切です。そして復職について検討した事項を患者本人や家族に伝え、それを踏まえて復職するのか新しい仕事に就くのかを患者本人と家族の間で話しあって決めていただくこととなります。リハビリでは定期的に評価し、なるべく早めに方向性を決めていき、また他職種と連携しながらサポートしていきます。

作業療法士 佐竹 夏帆



かしま荘通信

新年会 1月1日(日) & 餅つき 1月11日(水)



かしま荘では新年会・餅つきを実施しました。「福が訪れますように」と願いを込めて恵比寿様・弁財天様、獅子舞が登場。数年ぶりの餅つきは、利用者の皆様も手を叩いて喜ばれ、良い新年を迎えることが出来ました。

「第98回 常磐医学会」に参加します

令和5年2月18日(土)に「第98回常磐医学会」が開催されます。当院からは、診療部2名、リハビリテーション部1名、事務部1名の計4名が発表者として参加します。

次月号で学会での発表者からのコメントを掲載予定です!

